

中年よ 小士を抱け



アトム的心
鉄腕アトム
わか家のドラえもん
サンダーバード
水戸黄門
おもちゃ売り場
隠れファミコン・ファン
ローラーブレード
吾輩はニャーである
野良猫
ディズニーランド
日本一低賃金の宮崎

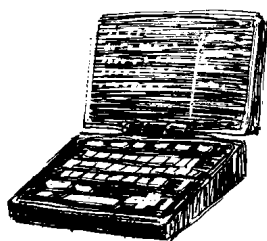


整形外科医のひとりごと

大江幸政

中年よ小志を抱け

整形外科医のひとりごと



大江幸政

南雲堂

大江幸政（おおえ・ゆきまさ）

1950年博多生まれ。宮崎県立大宮高校、日本
医大、同大学院卒、医学博士、大江整形外科
病院副院長。〒880 宮崎市大橋1-62-2

中年よ小志を抱け

——整形外科医のひとりごと——

定価 一、五〇〇円（本体一、四五六円）

平成五年七月十四日 第一刷発行

著者 大江 幸政

制作 株式会社東京読売サービス

発行 株式会社 南雲堂

〒162 東京都新宿区山吹町三六一

振替 東京六〇四六八六三番

電話 (〇三) 二三六八一三三四

FAX (〇三) 二三六〇一五四二五

印刷 藤原印刷株式会社

製本 株式会社渋谷文泉閣

もし落丁、乱丁本がございましたら、お手数ですが、小社通信係宛
ご送付ください。送料小社負担で、お取換えいたします。

この本の本文用紙は中性紙を使用しています。

中年よ小志を抱け

まえがき

医師という職業でもわかるように、ぼくは理科系の頭をしている。熱帯魚を見ると、文
化系の人にはあでやかな美しさや優雅に泳ぎ回る姿に目を奪われる。理科系のぼくは、消化
器官は、呼吸器官は、学術名はと考え始める。さらに、解剖でもしてみかなどと、ペッ
トショップの人が聞いたら卒倒するようなことを考える。風情、情、もののあわれなどと
は無縁の世界に生きてきた。

当然、若いころから数学、物理、生物などの科目が得意で、反面、英語、国語、社会は
苦手だった。特に作文が下手で、教師からは「文章の脈絡がシツチャカメツチャカで、ユ
ニーク過ぎます」とさじを投げられていた。感想文や卒論を書いていて、自分の文才のな
さに幾度くやし涙を流したことだろう。

ところが四十の声を聞いたとたん、何を思ったのか突然エッセイを書き始めた。ぼくが
狂ったのかと心配してくれるやさしい妻を無視して、毎日毎日書き続けた。体験したこと、
興味を持ったもの、自分の趣味など、手当たりしだいに文章にした。内容によつては妻の

検閲を受けなければならないので、自由な筆づかいとはいかない。これがネックとなり、各所で物足りない思いをされた読者に深く陳謝したい。しかし、この本の中には数点、妻に無断で掲載したものがあり、今後のぼくの運命に一抹の不安をおぼえる。

最後の「病院のサービスについて」以外のエッセイには、病院の「び」の字も、医師の「い」の字も出てこない。まったく医学とは関係のない文章で、どちらかといえば「わがままな中年」「いいかげんな父親」「だらしない夫」という立場で作ったものだ。

この本の題名から医学的な内容を期待された方には申しわけないが、テキヤからにせ物を買わされたときのように、人生の授業料だとあきらめていただければありがたい。

大江幸政

中年よ小志を抱け 目次

まえがき

2

花咲か青年

7

サフランライフ／8

ワープロ症候群／11

文章目いつパイ大作戦／13

カルチャーショック／15

キャンブ／19

バカヤロー若者言葉／23

にえーにえー言葉／26

カラオケ夜想曲／29

バーチャル・リアリティー／32

おばあさん／35

わが家の証券不祥事／39

カットハウス／42

ウサギとカメ／45

英会話／48

昼休み／51

書店にて／54

アトム的心

57

わが家のドラえもん／58

水戸黄門／61

サンダーバード／66

おもちゃ売り場／69

隠れファミコン・ファン／72

鳥 風／76

ローラーブレード／79

鉄腕アトム／81

ミスター・ワシントン／84

吾輩はニャーである／87

野良猫／92

デイズニールランド／95

日本一低賃金の宮崎／100

ソムリエとの対話

103

カレーライス／104

フランス料理／107

自動パン焼き機／111

くだもの狩り／114

牡蠣六十分一本勝負／118

パリの想い出／121

グアム／126

バリ島／132

最後に少しだけ 病院のサービスについて

137

娯楽／138

アメニティー／146

その他／160

あとがき

167

花
咲
か
青
年



サフランライフ

知り合いの方からサフランをいただいた。サフランといえばスペイン料理のサフランライスが有名だ。さっそく今夜のおかずにと料理法をたずねたが、鉢とか花とか要領を得ない。

「球根なんです」

「じゃあ、ゆり根のようにゆでたりして……」

「埋めるんです」

どうも話が食いちがっている。よく聞いてみると、社員がサフランの花を写真に撮って、会社の中でコンテストを催すらしい。ご本人は花の栽培が苦手で、写真にも自信がないからと頼みにこられたのだ。ゆでた球根の写真なんぞをコンテストに出したら、その方の出世にキズがつくかもしれない。食いしん坊の早がてんで、そんなことになったら申しわけない。責任は重大である。

いただいたというより栽培を押しつけられた感はあるが、花が好きなので文句をいわずに育ててみることにした。鉢に球根を埋めてから約一カ月で、松葉のような細い葉がたく

さん伸びてきた。ちょうど稲の苗に似た形だが、一直線にシャキッと立っている。つばみがいつ膨らむかと観察していたら、ある日突然花が咲いた。つばみを省略してのすばやい出現は、おっとりした日本の花とちがう風情がない。

「スゴイ、花咲かじいさんみたい」

近くにいた若者が感想をもらす。

「じいさん……」

ぼくが複雑な表情をしているのに気づいたのか、

「花咲かおじさんかな」

と言い直してくれたが、フォローになっていない。じいさんでも、おじさんでもいい。人間みんな歳をとるのだ。若者だって、いつかは必ずおじさんやおばさんになる。

そういえば有線放送で「わたしが、おばさんになーったら」と愉快な曲が流れているところか「あなたはおじさんよー」と続く。よけいなお世話だ。だれがおばさんになろうとも、ぼくはまだ若いんだ（と思い込んでいる）。

他の曲で「中年よ大志をいだけ」というのもあるが、この団塊の世代の中年は気が小さくて小志しかいだけない。クラーク博士も草葉の陰で、じだんだ踏んでいるだろう。

サフランの花は次々と咲いている。細い葉の根もとから直径四センチくらいのうす紫の花が、によきつと出ている。六枚の花びらには濃い紫の線がこまかく走り、黄色いおしべと真紅のめしべが鮮やかだ。

日ごとに開いて、やがてしおれていく。しかし、なかなか散らない。開き直ったかのようには、いつまでも散らない。咲くときはボツと勢いがいいが、散り際はいさぎよくない。こんな往生際の悪いサフランに、中年になつてもまだあがいている自分の姿が重なつて見えた。

ワープロ症候群

ワードプロセッサ、略してワープロという便利な機械がある。以前は大会社しか使えないほど高価だったが、年々値段も安くなってきた。最近では、おもちゃ屋で子供向けのワープロさえ売られている。ぼくも数年前から、文章を書くときには必ずワープロを使用することにした。しかし、歳をとってからの手習いなので、最初は五月雨のようにポツリ、ポツリとしか打てない。それでも最近は、努力の甲斐あって、どうにか使いこなせるようになってきた。プロ並みとは言わないが、左右の手を優雅に動かして打ち込んでいく姿はカッコイイ。中年男の大快拳だと自慢したが、誰も相手にしてくれなかった。

ところが、便利なワープロにも欠点があることに気づいた。ワープロで文章を作っていると、難しい漢字やうろ覚えの漢字もボタン一つでポンポン出てくる。たとえば、喧々囂々（けんけんごうごう）とか、侃々諤々（かんかんがくがく）という言葉も簡単に書ける。だから平仮名で打ち込んでいても、思わず変換のキーを叩いてみる。出てきた漢字が、ふだん自分でも使わないまれなものでも、正しい用語例と錯覚して使ってしまう。漢字だらけの読みにくい文章なのに、自分が偉くなったような気がして一人で悦に入っている。

時々変換キーをたまらなくいとおしくなり、思わずそつとなでたりする自分が怖くなる。麻薬と同じで、変換キー中毒になっているワープロ使いは、ぼくだけののだろうか。

最近、さらに重大な欠点に気がついた。いつもワープロばかり使っているので、いざ自筆で書こうとするときに、それらの難しい漢字が思い出せない。そればかりか簡単な漢字でさえ頭に浮かばないこともある。ワープロを打っているときには、出てきた漢字を図形パターンとして認識しているからだろう。正確な書き順は知らなくても、目で見た感じだけで「これっ」と選んでいるのである。

そのためか、この頃、自筆で手紙などを書いていると、小学生が書いたかのような仮名だらけの幼稚な文章になり情けなくなってしまう。まさか、そのまま他人様に宛てて出せはしないので、もう一度ワープロで打ち直すか、泣く泣く辞書を引いている。

昔はミョウガを食べると物忘れがひどくなると言われたが、現代ではワープロがそれに取って変わったようだ。

これらの病態をワープロ症候群と名づけた。この病気は難治性で、放っておくと、かなりの重症になってしまう。なんとか治したいと知り合いの医師に相談したが「単に脳の老化現象でしょう」と診断された。

文章目いつパイ大作戦

結婚式や会合でのスピーチを頼まれることがある。ていねいに頭を下げてお願いされると、しばしボーゼンとしたあと、猫のように柱をガリガリかきむしり、シカトする。依頼される方には、文章を書いているくらいだからスピーチも慣れているだろうとの思い込みがありがたい。しかし、スピーチと文章では天と地ほどの差がある。文章は何日もかけてゆっくり作っていただけるので、自称牛歩随筆家のぼくにピッタリだが、スピーチはそうはいかない。原稿があるにしても、間の取り方やユーモアたっぷりの話し方などを、ぶっつけ本番でこなすのは難しい。途中で辞書を引いたり参考資料を調べようものなら、水をぶっかけられる。単調な話に眠気をさそわれて全員が寝てしまったら、主催者に土下座しなければならぬ。などと、クドクド弁解してきたが要は話しべたなのである。

文章を書くことは意外と簡単だ。ちょっとしたエピソードと根気さえあれば誰にでもできる。雑誌の投稿欄に「こんなドジしました」というのがあるが、その調子でいい。題材が決まったら、ざっと書きなぐってみる。その前後の心理や場面を最大もらず入れ、どんなドジをかませたかを赤裸々に描写する。いくら冗長でもドラドラでもいい。それから

全体を整理していく。一つの文節が長すぎるものは途中でカットし、言いまわしがおかしいところは辞書で修正する。です・ます体と、だ・である体が混在していないか、同じ語尾が続いていないかなどをチェックし、最後にひと晩冷蔵庫に寝かせる。そうすると味が染み込んでおいしくなる、などとチャカしていると怒られそうなので次にいきたい。

実は、このひと晩寝かせることこそが、とても大切なのである。翌日、あらためて読みかえてみると、客観的になることができる。すつきりしない部分や説明不足のところが目についてくる。できれば一週間ほど引き出しにしまい込んで書きなおすともっといい。完成したら友人知人に片っぱしから配る。めんどろ臭さがられても迷惑がられても、あきらめてはならない。あくまでも押しの一手でいく。恋愛と同じで、そのうち氣にいつてくれる（かもしれない）。

文章を書くのは楽しい。ふだんは話したの自分が、饒舌な別人になったような氣がしてくる。口では言えないことも、ポンポン出てくる。大ぶろしきや根も葉もない噂も自由自在だ。ただし、そのために大騒ぎになっても当局は一切関知しないから、そのつもりで。諸君の健闘を祈りたい。なお、この欄は自動的に消滅しない。